令和２年９月14日

◆　魔法の言葉　◆

第44回全国高等学校総合文化祭（2020こうち総文）がWeb上での開催となる，との報道があったのが，５月12日。当初，どのような形での開催になるのだろうと気になっていたのだが，８月６日に実施された総合開会式をはじめ，各専門部での力作が連日web上にアップされている。この厳しい状況の中，開催に尽力なさった関係者に敬意を表したいと思う。

さて，本県でも本校を含めたくさんの作品が公開されているが，その性格上，パフォーマンスを伴う音楽関係の各部門は様々な工夫をしての参加（「吹奏楽部門」はこちら）である。

過日，「器楽・管弦楽部門」の演奏をWeb上に公開するための収録を実施するとのことで，今年度からその任を務めさせていただいている県高等学校文化連盟会長として，参加する生徒の皆さんの応援に赴いた。

演奏団体は「茨城県合同弦楽合奏団」。勝田高・土浦一高・下妻一高・並木中等教育学校46名からなる合同演奏だ。私事になるが，このうち２校で弦楽部の顧問として携わっていたこともあり，どのような演奏になるのか楽しみでもあった。

「器楽・管弦楽部門」の弦楽合奏団の全国総文への初めて出場は，2007年「しまね総文」での土浦一高弦楽部。その後，今回のような合同弦楽合奏団が編成され，その都度メンバーは入れ替わるが，全国総文においても質の高い演奏を繰り広げてきた。そして，ここ10年ほど，この合奏団を熱心に指導していただいているのが，作編曲家の啼鵬（ていほう）さんだ。昨年は「いきいき茨城ゆめ国体」での行進曲　『いばらきふるさとメドレー』　などでもお世話になっている。

曲は　『リュートのための古風な舞曲とアリア第３番　第１楽章・第３楽章』　（Ottorino Respighi）。久しぶりの合奏ということもあり，なかなか弦楽合奏特有の柔らかな音色にならない。特に第３楽章，チェロの難しいフレーズ。スケールを降りきった後の開放弦Cの音が合わない。その時，啼鵬さんがチェロパートに向かって何か言った。

「・・・・・・」

チェロパートで何やら話をしている。再び演奏が始まり，音楽は徐々に瑞々しさを取り戻した。そして収録の際にはとてもいい演奏になっていた。ぜひ，ご覧ください。

さて，この啼鵬さんの言葉。実は少し聞き取れたのであるが，チェロの演奏に関して，具体的に何かを指示するようなものではなかった。いわば「魔法の言葉」…。

大切なものは目に見えない…，それをしっかり受け止めて音にした生徒の皆さんに拍手！

これまでもこのメッセージに何度も書いたが，今回も音楽の素晴らしさとともに，生徒の皆さんのポテンシャルの高さを実感した。改めて，「アートは人類の生命維持装置」とするモニカ・グリュッタース独文化相の言葉を思い起こした一時であった。